埴輪からみた藤原宮域の古墳時代

はじめに

『日本書紀』持統７年２月条の「詔造京司衣縫王等収所掘屍」という記事から、藤原宮・京の造営時に古墳を破壊したことがわかる。発掘調査によっても藤原宮の下層には、古墳時代の遺構や遺物が存在することを確認している。古くは戦前の日本古文化研究所による調査で、埴輪の出土が報告されている[1)]。近年も京域では四条古墳や下明寺古墳などが、宮域では大極殿院・朝堂院地区の発掘調査が進み、多数の埴輪が出土した。また、飛鳥藤原第131次調査では、宮造営時に破壊された古墳を検出する（本書102～104頁）など、宮周辺の埴輪や古墳の様子が具体的に見え始めた。これを機に、藤原宮とその近隣の古墳時代について考えたい。

藤原宮域出土の埴輪

1980年までに出土した藤原宮・京域出土の埴輪を報告した『藤原報告Ⅲ』では、円筒埴輪を大きく３群に分け、出土状況から宮域内外に古墳が存在することを指摘した[2)]。分類の詳細は報告を参照されたいが、Ⅰ群を４世紀後半～５世紀前半、Ⅱ群を５世紀後半、Ⅲ群を６世紀前半に比定している。新たな出土例を加えて、再度藤原宮域の主な埴輪出土地とその埴輪を概観してみる（図20）。

１次　宮南面中門とその南方にあたる。約280片出土。各群が混在する。Ⅱ～Ⅲ群がやや多い。

17次　日高山北麓に位置する。約190片。Ⅰ・Ⅱ群が各２割、残り６割はⅢ群に属し、各群に形象埴輪が伴う。

20次　宮造営時の運河から出土。約28片。Ⅰ群とⅢ群が半数ずつある。Ⅰ群は軟質だが摩滅が少なく、赤色顔料がよく残る。Ⅲ群は硬質だが摩滅している。

23次　17次の東南に位置する。約165片。埴輪の諸特徴や各群の出土割合は、17次とよく似る。

40次　日高山１号墳に伴う。内法で一辺17mの周濠内に、想定28本の円筒埴輪と、蓋形・鶏形埴輪が立てられていた。有黒斑だが突帯のやや低い、５世紀中頃のもの。

45-2次　日高山東麓の谷を埋めた、厚さ３mに達する朱雀大路造成に伴う整地土中から多量に出土。約420片。Ⅰ～Ⅲ群のほかに、日高山１号墳のものに似る５世紀中頃の埴輪が含まれる。

113・118・124・131次　高所寺池堤防改修工事に伴う一連の調査。131次では約250片が出土。いずれの調査でも、Ⅲ群の埴輪が８～９割を占めるが、131次の古墳周濠SD9820では、Ⅱ群がまとまって出土した。

120次　朝堂院東第二堂北半部にあたる。約350片。約８割がⅠ群に属する。形象埴輪は、外面に赤色顔料が明瞭に確認できる大きな破片が多い。中でも、大きさや形態が、大阪府津堂城山古墳例に類似する蓋形埴輪や大型の家形埴輪は、小規模な古墳ではあまり見ないものである。

125次　朝堂院東第二堂南半部。約130片。約８割がⅠ群に属する。埴輪の諸特徴は、120次と酷似している。

128次　朝堂院東南隅。約250片。９割近くがⅢ群に属する。出土点数は多いが、小片のみで形象埴輪は少ない。

なお、日本古文化研究所の調査では、字南城殿（朝堂院西第二堂付近）から蓋形埴輪立ち飾り部が、１次調査と同位置にあたる南面中門南方からは円筒埴輪や家形埴輪の出土が報告されている[3)]。蓋形埴輪はⅠ群に、円筒埴輪や家形埴輪は、Ⅲ群に属すると考えられる。

３つの古墳群

以上をまとめると、藤原宮域の埴輪の出土状況は、大きく３つに分けることができる。すなわち、A）Ⅰ群が大半を占めるもの。朝堂院北半部（120・125次）。B）Ⅲ群が大半を占めるもの。朝堂院東南隅および宮東南部（128次と高所寺池の各調査）。C）Ⅰ～Ⅲ群が混在するもの。大極殿院および日高山丘陵北麓から宮南面中門（１・17・20・23・45-2次）、である。

A：朝堂院北半部やその周辺から出土するⅠ群の埴輪は、軟質であるにもかかわらず遺存状態が良く、遠くから運ばれたとは考えにくい。特に、朝堂院東第二堂からはⅠ群が集中して出土しており、近傍に５世紀前半の古墳が存在する可能性が高い。

B：宮東南部の埴輪は、Ⅱ群をもつ131次の古墳周濠を除くと、Ⅲ群が多数を占める。付近に古墳があったと思われるが、出土量が少ないことからやや離れた場所にあったと推定される。朝堂院東南隅でも、宮東南部と同様にⅢ群が集中している。宮南面中門より南方では日高山丘陵の埴輪が広がっていたが、朝堂院には及ばない。出土した埴輪はいずれも小片で硬質に焼成している反面、摩滅が進んでいるため、直近ではないがさほど遠くないところに古墳があったのだろう。

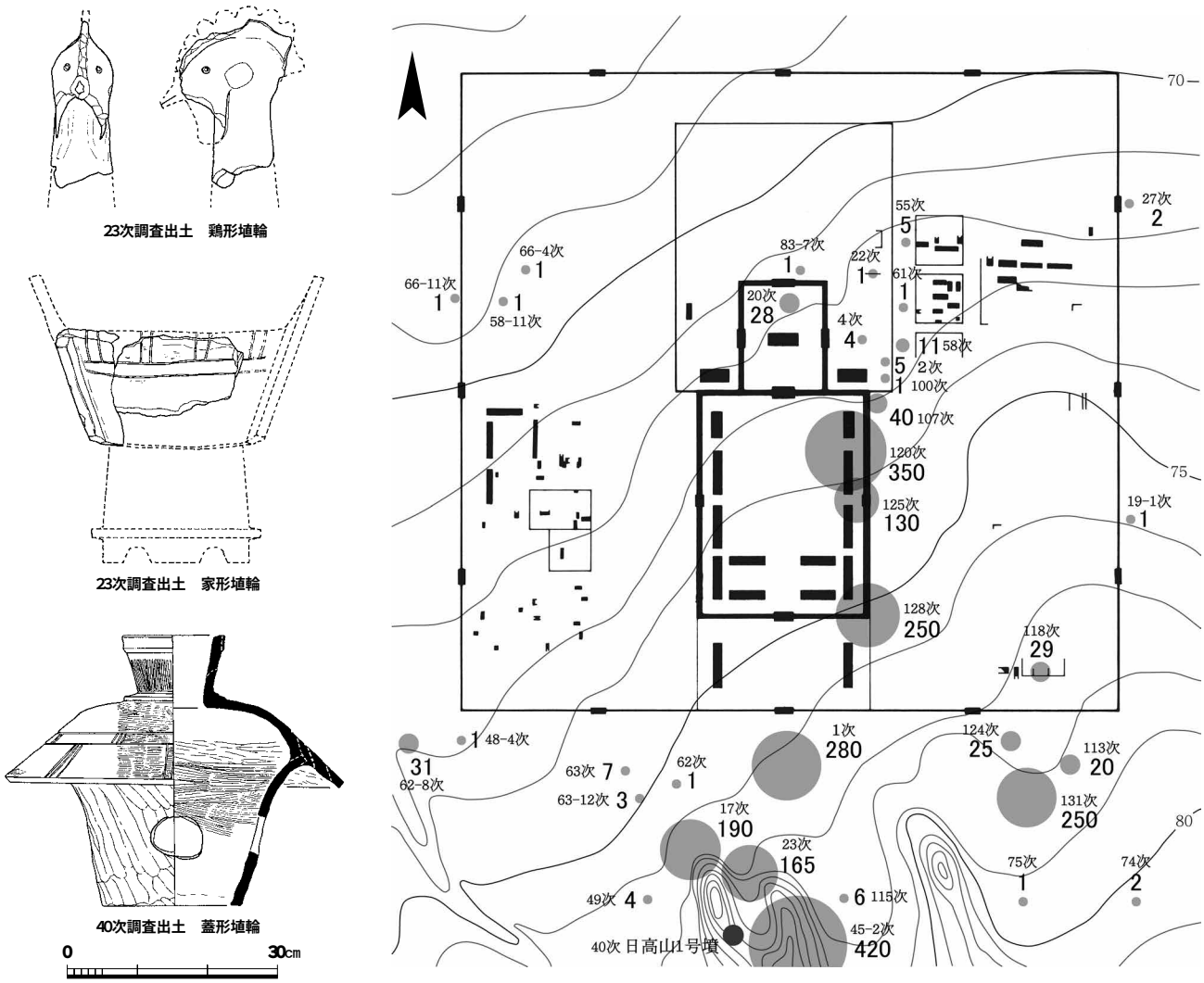

図20　藤原宮域の埴輪出土地点と出土埴輪　1:10,000　1:10

C：日高山丘陵とその周辺は、朱雀大路を通すために丘陵を削って大規模な造成工事をしたことがわかっている。その整地土にはⅠ～Ⅲ群が混在しているため、日高山丘陵上には、Ⅰ～Ⅲ群各期（４世紀末～６世紀前半）にかけての古墳が存在していたのである。

古墳の造営主体

以上のように、藤原宮域には３つの古墳群を想定することができる。その造営主体を考えるため、藤原宮域の集落遺跡をみてみる。

Ⅰ群に対応する時期の集落は、藤原宮西北部（94次）や宮東方官衙地区（38次）などで確認されているが、両集落ともに規模は小さく、朝堂院北半部近くに想定する古墳の造営主体は不明である。

Ⅱ・Ⅲ群に対応する時期の集落は、東方官衙地区と宮東南部・西南部にある。東方官衙地区では、５世紀後半の棟持柱をもつ掘立柱建物と、東西約50mの区画内に整然と配置した、６世紀の総柱建物を検出している。一般集落ではなく、屯倉や豪族の居宅の一部と推定している（41・44次）。宮西南部（62次）や香久山西麓（45～47次）、宮東南の高所寺池（113・118次）では、竪穴住居や韓式系土器が出土し、渡来人も居住する一般集落であるとみられる。しかし、彼らは埴輪を樹立した古墳は営まなかっただろう。渡来人の集落をのぞけば、現在のところ概期の集落は、宮東方官衙地域しかなく、有力な候補地である。そこは、南から北にのびる舌状の微高地にあたり、現在も木之本町や高殿町の集落が営まれている。集落を営む最好適地である微高地には、高所寺池や日高山を墓域にしていた人々の集落が存在する可能性が高い。

おわりに

藤原宮内から出土する埴輪の数は、直接古墳に伴って出土する場合に比較して著しく少ないが、古墳の位置や造営主体をある程度考えることが可能である。藤原宮のある奈良盆地南部は、大和古墳群を擁する盆地東南部に比べ前・中期古墳の分布は希薄であるとされていたが、今後、明確な遺構の確認が期待できる。　（前岡孝彰）

注
1）日本古文化研究所『藤原宮阯伝説地高殿の調査二』1941。
2）「飛鳥・藤原地域の埴輪」『藤原報告Ⅲ』1980。
3）出土埴輪の一部は、橿原市立鴨公小学校に所蔵されている。